西脇市におけるコロナ禍の移住・子育て支援施策と

茜が丘複合施設 Miraie 魅力づくりプロジェクト

杉山 武志
（兵庫県立大学）

1. はじめに

西脇市とは、筆者が本学部に着任以来 6 年間にわたって、フィールドワーク、専門ゼミ、EHC プロジェクト「にしわき☆スタディーズ」（当時）など教育研究活動を通じて連携してきた。先端食科学研究センターにおいても、西脇市との共同研究プロジェクトの実績がある。筆者が主担当教員として携わった 2019 年度の副専攻「地域創生人材教育プログラム」の 2 回生科目の実施に際しては、本学と西脇市との間で包括連携協定（本学 4 例目）を結ぶなど、双方の信頼関係を構築してきた。

特色化プロジェクトの主なフィールドの対象は播州地域と聞いている。西脇市は周知の通り、北播磨に位置する。ドイツの都市計画学者トマス・ジーバーツのいう都市でもなく農村でもない「間にある都市」の代表的存在の一つが西脇市（杉山・太田・三宅 2019）と捉えられる。良かれ悪かれ播州地域の特色の一つといえる「間にある都市」は、神戸、大阪に立地する他大学との差別化をはかる意味においても、本学部の研究対象として魅力になりうる。

そうしたなか、筆者が注目したいのは、コロナパンデミックを機に、都市でもなく農村とも言い難い地域が移住の対象としてクローズアップされてきていることにある。時流のキャッチーなフレーズには注意が必要だが、「コロナ移住」が話題になってきている（藻谷 2020）のは事実であろう。地域研究のフロンティアとして、播州地域に点在する「間にある都市」への移住をめぐる議論を深めていくことは、本学部の特色ある教育研究活動に貢献しうる可能性を秘めている。

その議論のきっかけとして本稿では、コロナ禍において、西脇市に移住してきている若い世代の暮らし、子育てをめぐる日常的交流をどのように回復・支援していこうと試みているのか検討する。そのうえで、どのような特色化プロジェクトを開発できるか、実現可能性を探った速報的な成果を示したい。

2. 西脇市茜が丘複合施設 Miraie について

本プロジェクトの舞台は、西脇市茜が丘複合施設 Miraie を中心とした地区である。西脇市野村町茜が丘は、西脇市のなかで人口密度が最も高くなってきている地区の一つであり、2020 年 12 月時点での住民 1,215 人の平均年齢 34.36 歳、高齢化率 6.17%

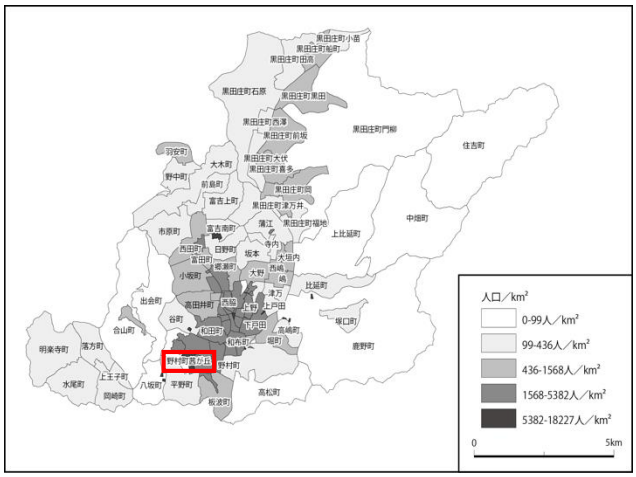


図 1：西脇市人口密度分布
出所：杉山・太田・三宅（2019）に加筆

となっている。茜が丘を含む野村町全体としての高齢化率も 23.49%に踏み止まっており、西脇市内で高齢化率 30%をこえていない唯一の町でもある [1)]。

2015 年 10 月に開館した Miraie には、こどもプラザ、男女共同参画センター、図書館、コミュニティセンター重春・野村地区会館の 4 つの機能があり、屋外には遊具のある芝生広場、防災設備が備わっている。「“まちの未来につながる理想の居場所になるように”との願いが込められた愛称どおり、子どもから大人まで誰もが楽しみながらゆっくりと過ごすこと」が Miraie のコンセプトとされている [2)]。

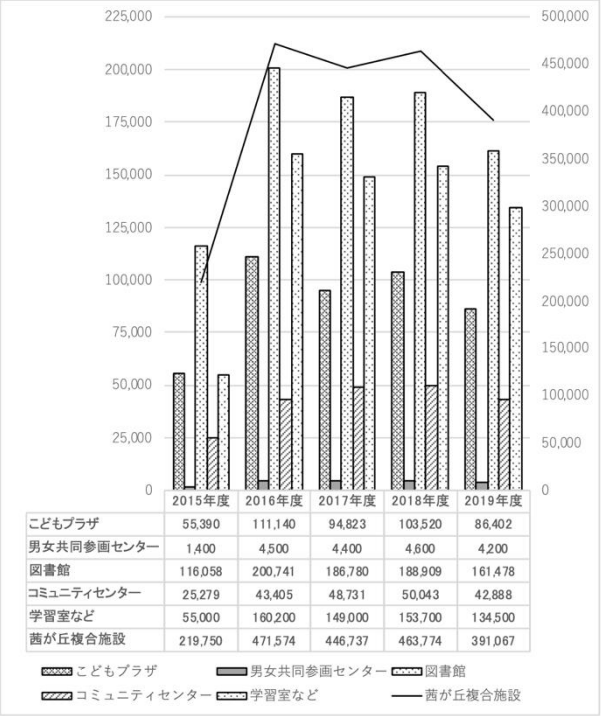
図 2：Miraie 外観と内観
（右下の写真は RREP の講義での様子）
出所：いずれも筆者撮影（コロナ禍以前のもの）

3. コロナ禍における Miraie の現状

Miraie の利用者数は、2018 年度まで順調に推移してきたが、コロナパンデミックの発生した 2019 年度は減少に転じた（表 1）。これは、1 カ月ほどの休館が原因の一つである。1 回目の緊急事態宣言を経たのち、2020 年度の事業計画に盛り込まれていた「こどもの日イベント」「こどもプラザ夏まつり」など Miraie の子育て支援の主たる事業は、相次いで中止を余儀なくされた。一方、Miraie 屋外で水鉄砲やしゃぼん玉などの水遊びを体験する「みらいえ DE みずあそび」や Miraie のロータリーを開放してアスファルトにチョークで落書きして楽しむ「みらいえ DE らくがき」、夜の星空観察など、屋外イベントに重点が置かれるようになってきている。Miraie が屋外を有効に利用することでイベントの継続に注力するのは、子どもたちの遊び場の提供という目的だけではなく、子育てする親たちの「孤立化」を防ぎたい意図があるという。

上述のような工夫のもと 2020 年度の事業が進められてきたものの、コロナ禍における Miraie の魅力づくりという面ではやや苦労している実情があるという。そうしたなか、Miraie での事業を基軸に、子育て世代の暮らし方、働き方を育みなおす新たな視角が西脇市において求められている。特に、このコロナ禍において、西脇市に移住してくる移住者たちをどのように地域コミュニティに包摂させていくか、特色ある移住者支援と子育て支援の施策検討が喫緊の課題となっている[3]。

表 1：Miraie 利用者数の推移（単位：人）



	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
こどもプラザ	55,390	111,140	94,823	103,520	86,402
男女共同参画センター	1,400	4,500	4,400	4,600	4,200
図書館	116,058	200,741	186,780	188,909	161,478
コミュニティセンター	25,279	43,405	48,731	50,043	42,888
学習室など	55,000	160,200	149,000	153,700	134,500
茜が丘複合施設	219,750	471,574	446,737	463,774	391,067

出所：西脇市こどもプラザ運営委員会資料より作成

注 1：数値は延べ人数。

注 2：第 2 軸の人数は茜が丘複合施設のみに対応。

4. 開発中のプロジェクト概要と実施見込み

さて、筆者の研究室では、当該プロジェクトの検討を 12 月から開始した。上述した事前リサーチ、西脇市都市経営部次世代創生課および Miraie 事務局との話しあいを経て、コロナ禍における「Miraie 魅力づくりプロジェクト」を 1 月下旬より本格稼働させようと準備を進めていた。参加する学生を 3 人ずつ 2 班に分けて、学生の視点からの研究調査を行う計画となっている（図 3）。

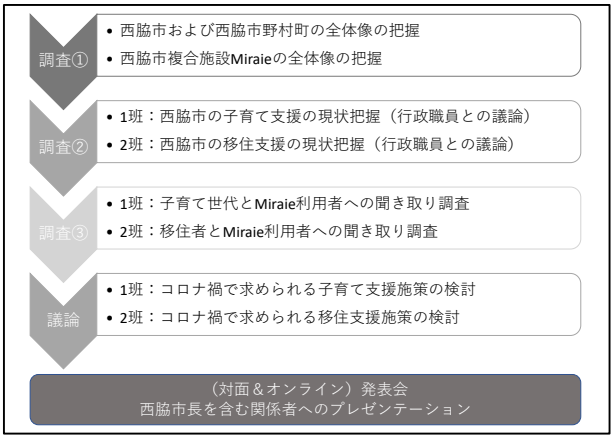


図 3：プロジェクト実施手順

出所：筆者作成

しかし、2021 年 1 月 13 日より、兵庫県も 2 回目の緊急事態宣言の対象となったことにより、西脇市とも相談の結果、開始時期を延期せざるを得なくなった。初回をオンラインとする可能性も模索したが、①西脇市が実訪問を望んでいること、②初回をオンラインで学生に実施させるのはハードルが高すぎると判断したことから、本格稼働を延期することとした。関係各位との日程等再調整も必要なため、宣言解除のタイミングを勘案したプロジェクト再開は、早くとも 3 月中旬と見込んでいる。

ただ、12 月以降の諸検討によって、コロナ禍における西脇市との新たな研究調査プロジェクトの開発を行えた意義は大きかった。プロジェクトの実施自体は確定させており、次年度にかけて筆者の研究室のメインプロジェクトとして稼働させていく。

注

1） 西脇市ホームページ「統計情報」より。

2） Miraie ホームページより。

3） 西脇市からの聞き取り。

参考文献

杉山武志・太田尚孝・三宅康成（2019）「間にある都市」の超克に向けたネオ田園都市論の構想－都市計画学、農村計画学、人文地理学の対話から－，『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』21, pp.101-119。

藻谷ゆかり（2020）『コロナ移住のすすめ－2020 年代の人生設計－』毎日新聞出版。